

図書館だより

17号

岩手で〈本当の幸せ〉を考える

図書館長 村田 和穂



昨年11月に全国図書館大会が岩手県盛岡市で4年ぶりに対面形式で開催されたので、参加してきた。今大会のテーマ〈理想郷“イーハトーブ”で本当の幸せを考える〉は宮沢賢治の愛読者には非常に興味深いものがある。〈イーハトーブ〉とは岩手出身の賢治による造語で、彼の童話の舞台と考えられている。また、〈本当の幸せ〉は彼の代表作『銀河鉄道の夜』で追求される主題でもある（ただし原文は「ほんとうの幸（さいわい）」となっている）。初めて訪れた岩手で宮沢賢治のすばらしさを再認識できたこともあり、今回は賢治に焦点を絞って岩手滞在の報告をしたい。そもそもテーマが示唆するように、大会の内容も〈宮沢賢治〉を強く意識したものになっていた。一例を挙げると、本間希樹氏（国立天文台教授）による記念講演の演題はなんと〈岩手発 ブラックホール行き 銀河鉄道の旅〉！岩手県にある水沢VLBI観測所の所長でもある本間教授はブラックホールの輪郭の撮影に世界で初めて成功した研究グループの中心人物だが、講演では賢治が水沢観測所を生前に何度か訪れていて、そこで見聞したことが彼のいくつかの童話作品に反映されていることが述べられた。その他で強く印象に残っているのは、開会式で披露された岩手県立不來方（こずかた）高校音楽部の生徒たちによる合唱。ここで歌われた曲の一つに賢治自身が作詞作曲した「星めぐりの歌」があった。「あかいめだまのさそり（後略）」の歌詞に付けられた音楽は一度耳にしたら忘れられない素朴な味わいがある（昨年公開された映画『銀河鉄道の父』では、菅田将暉扮する賢治がチェロでこの曲を弾き、村人たちがそれに合わせて歌う素敵なシーンがあった）。会場を真っ暗にした中、ロウソクのようなライトを手にした生徒たちが客席から歌いながら一人ずつ厳（おごそ）かに舞台に登場する演出は、きらめく星座の動きを連想させるほど幻想的で美しく、歌声による精妙なハーモニーと相まって、不覚にも目頭が熱くなった。

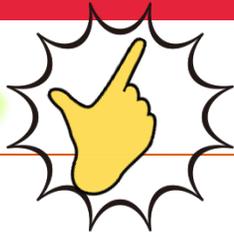
大会終了後に、賢治の生まれ故郷の花巻にある〈イーハトーブ館〉と〈宮沢賢治記念館〉に立ち寄った。記念館には、賢治が愛用したチェロと妹トシのヴァイオリンが仲良く隣り合わせに展示されていて、その前で足を止め、しばし感慨にふける。パネル展示も充実しており、帰りの飛行機の関係で急がなければならないのに、あるパネルの前で釘付けになった。それは、宮沢賢治の生涯最後の、亡くなる十日前の日付の、手紙のコピーであった。賢治の言葉は、詩や童話だけでなく、友人や教え子に宛てた手紙にもすばらしいものがあるので『宮沢賢治全集9 書簡』（ちくま文庫）を時々読むのだが、この手紙には気づかなかった。賢治の教師時代の教え子、柳原昌悦に宛てた最後の手紙には次のような言葉がある。「（前略）風のなかを自由にあるけるとか、はっきりした声で何時間も話しができるとか、じぶんの兄弟のために何円かを手伝へるとかいふやうなことはできないものから見れば神の業にも均しいものです（後略）」。これを書いている賢治は、家の外を思うように歩いたり、長時間明瞭に話をする体力がもはや尽き果てていたことが窺（うかが）い知れ、切ない思いに駆られる。それなのに、最後の力を振り絞って賢治はこの手紙を書いたのだ。教え子が大切に保管していたおかげで、この手紙は記念館のパネルに（そして活字となり『全集』に）収められ、今の私に強く訴えかける。

『銀河鉄道の夜』の主人公ジョバンニが問いかけ、親友カムパネルラが「僕わからない」と言った〈本当の幸せ〉とは何か、私にもはっきりとはわからない。しかし、今の私には「風のなかを自由に」歩き、「はっきりした声で何時間も話しができる」体力が、有難いことに、残されている。これも一つの〈本当の幸せ〉なのだろう。このことに感謝して、現在の仕事を通して〈本当の幸せ〉を追求していきたい。晩秋の岩手の清冽な空気を肌で感じながら、そう考えた。

付記：「図書館だより」13号の巻頭言に書いたことは、『銀河鉄道の夜』の〈本当の幸せ〉についての（その時点での）筆者の一見解である。



私のイチオシ



人間・福祉工学系
メカニクスコース 原 槇 真也 先生

『孤高の人（上・下）』
（新田 次郎 著）



2024年1月1日阿蘇中岳
からの御来光をバックに

村田先生より「私のイチオシ」の原稿執筆の話があった。このようなお話を頂けるのは光栄な事で、有り難い事なのだが・・・。読みたい本があれば衝動的にAmazonで購入はするものの、手に入れて安心してしまふのか、読破する事なく積読状態になる事が多いので、受けるか断るか迷っていた。そんなある時、「山やギターの話とかは如何ですか？」とアドバイスを頂いた。何か新刊を紹介しようと思っていたが、山と言えば大学時代に同じ研究室の山好きの先輩から薦められて読んだこの本を思い出した。この本の影響で登山に興味を持ち、魅了され、その後の生き方を変えたと言っても良い位の本である。荒筋は凡そ記憶はしているものの、細部は忘れていたので、イチオシとするからには曖昧の状態では失礼なので、読み直しをする事から始めた。ギターの話はまた別の機会にでもしたい。

私は長く登山部の顧問をしている。部活の登山だけでなく個人的にも良く山に登る。これまでに500回以上の山行を行ってきた。最近はその記録をYAMAPにアップしており、「YAMAP 有明高専」で検索するとヒットするので興味のある人は見て頂きたい。直近では今年(2024年)の元日に卒業生と初日の出登山に行ってきた。今回の初日の出登山は単独、パーティ登山含め丁度30回目の節目となる山行であった。午前3時、大牟田駅に集合し、5時登山口に着く。空を仰ぐと乙女座とその1等星のスピカが輝いて見え、御来光への期待が高まる。ヘッドランプを点け、薄暗い森の中を歩き始める。1時間程歩き続け徐々に高度を上げて行くと、急に傾斜が厳しくなり、ロープが設置してある急斜面に出る。斜面は前日の雪で凍り付いている。今回アイゼンは装備しておらず、滑りやすい足元に注意しながら、また仲間へ安全なルートを促しながら、着実に一步步慎重に斜面をよじ登る。危険箇所を無事に越え稜線に出ると、木々の間から熊本市内の綺麗な夜景が薄明の下に見えてきた。徐々に暁色に変わっていく空に宇宙の神秘を感じながら、最後の岩場の斜面で一気に高度を上げる。山頂近くの開けた丘に出ると、急に東風が強くなりガス（雲）が出てきた。氷点下の気温に加え、強風で体感温度は更に寒く感じられ、風上を向くと露出する顔が痛い程である。オレンジと濃紺のグラデーションで染まる朝焼けの幻想的な空に畏敬と畏怖の念を感じつつも、時折強風で流れ来る分厚いガスに不安を抱えながら、極寒の山頂でご来校まで暫く待機する・・・。

下手糞ながら途中まで私の山行記録を書いてみたが、如何であったろうか？表現力の乏しさはさて置き、少しは大自然の美しさや厳しさを想像する事ができたであろうか？続きは皆さんが想像するか、体験するかして欲しい。私がイチオシするこの本は大自然の描写力は私の比ではない事は勿論の事、自然や山の気象を作者の豊かな経験や観察、それに理論的裏付けに基づいて書いてあり、そのため描かれる情景が本当に目の前で起きているかのようなリアルさがある。厳しくも美しくもあるダイナミックな自然の世界に導いてくれるのである。それもそのはず、著者は我々と同じ工学系の出身であり、気象学者である。中央气象台（今の気象庁）に勤め、真冬の富士山頂の気象観測所に勤務し、その時この本の主人公、加藤文太郎氏と出会っている。NHKのプロジェクトX「巨大台風から日本を守れ」で取り上げられた富士山頂気象レーダーの建設責任者も務めたと言う異色の経歴の持ち主である。また主人公、加藤文太郎も三菱造船所のエンジニアであり、実在した人物である。ヒマラヤ登山を目標に掲げ、その達成のために訓練としての冬山登山、更には合理的・安全な登山のために装備の科学的工夫や日頃の訓練に信念を持って寡黙に続けたその生き方は、何処か我々エンジニアの生き方や考え方とも重なって見えてくる。

人はなぜ山に登るのか？ 答えは人夫々である。この本を読んでみるなり、実際に登山を経験するなりして貴方だけの答えを見つけては如何かな？



私のイチオシ



図書館運営室・室員
鮫島 朋子（一般教育科）

『ソフィーの世界 哲学者からの不思議な手紙』
（ヨースタイン ゴルデル 著・池田 香代子 訳）

『パパは脳研究者 子どもを育てる脳科学』
（池谷 裕二 著）



「私のイチオシ」というお題をいただきましたが、実際「推し」と言えるほどの本が思い浮かばずちょっと困りました。どうしようと色々考えていたら、ふと思い出したことがあります。幼いころに見たとても怖かった夢。何の脈絡もないところが脳の機能の不思議なところなのですが…。

このとき見た夢の中で、今でも覚えている2つの場面があります。真っ暗で底の見えない黒い穴に引きずり込まれそうになる場面。そこから必死に逃げて、ふと気が付くと自分一人だけの世界になっていた場面。黒い穴も怖かったですが、誰もいない世界はとても不安で恐ろしかった。他の人はどこに行ったの？なぜ自分だけ？次は自分がいなくなる番なの？みんないなくなったら世界はどうなるの？

この頃ぐらいから、自分という存在を意識し始めたような気がします。みなさんも一度は考えたことがあるのではないのでしょうか？「自分」が存在していること不思議さを。今、いろいろ考えている「自分」って何なのか？「他人」と「自分」の違いは何なのか？

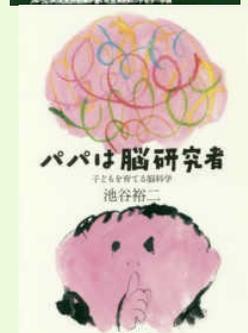
一方で、考えたり感じたりといった事象は、結局のところ脳内の神経ネットワーク上を伝播していく電気信号によって引き起こされていて、様々な思考や感覚・感情の相違は、この伝播のパターンの違いに過ぎないはずで。だとすると、「自分」の存在がますます不思議なものに思えてきますし、電気信号のパターンを制御することで他人の感情をリアルに再現できたり、他人の感覚（痛さとか）を体験できたり、他人の思考を辿ったりできるのではないのかな…なんてことを妄想したりしています。

前置きが長くなりましたが(笑)、今回は、こんな私が面白いと感じ印象に残っている本を2冊紹介したいと思います。

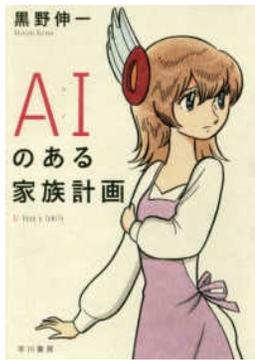
1冊目は『ソフィーの世界』です。ソフィーという女の子のもとに差出人がわからない手紙が届きます。手紙には“あなたはだれ？”のたった1行のみ。ここから手紙を通して哲学の講義が始まります。ソフィーは”わたしっていったいだれなんだろう？”と改めて自分自身を見つめ直していきます。この本に出会い、誰でも通る問いなんだと、ひとまず安心したように思います。世界はどうなっているのかという壮大な問いに哲学者たちがどのように対峙したのか。先人の知恵を学ぶことができる一冊です。哲学の入門書とも言われており、とても読みやすい本ですよ。当時、プラトンのイデア論に関連する部分を読んだときは、世界には表と裏があるという考え（正しい理解ではないかもしれませんが…）に感銘を受けたのを思い出します。

2冊目は『パパは脳研究者』です。赤ちゃんの成長について、脳科学の観点から語られています。生後1か月ぐらいの赤ちゃんは、視界に入ったものを「物体」としては認識できていない。自分の手が見えても、それを「自分の手」として認識していない。脳内のネットワークが繋がりに「物体」を認識するし、体の動きと脳が繋がりに「自分の手」を認識する。脳が成長し、1つ1つ順番にできることが増えていくようです。「いないいないばあ」ってすると赤ちゃんはよく笑いますが、この反応も生後6か月以前と以後とは、喜んでる理由が違うそうですよ。面白くないですか？！脳のはたらきは不思議で面白い！そんなことに改めて気づかせてくれた1冊でした。

勉強も赤ちゃんの成長と同じかもしれません。勉強していて、理解できない問題にぶつかることがあるかと思います。Dを理解するには、Cを理解しないとイケない、でもそのためにはBを…。A→B→C→Dと順番に理解していくことが大事だったりします。どうしても分からないとき、今はまだDを理解するレベルに到達していないのかもしれないと、一度自分の立ち位置を俯瞰してみるのも大切かもしれません。



専攻科生より本科生に薦める1冊の本



『AIのある家族計画』
黒野 伸一 著



71
山本 裕季

私が紹介する本は、黒野伸一氏著『AIのある家族計画』です。AI技術が発展した近未来を描いた物語で、老親の介護、職場でのリストラ不安、実家へ帰った妻、反抗期の娘など、悩み多き中年サラリーマンの村山健司と、健司がとある理由から雇った家政婦の恵、娘である瑠璃の視点で物語は進んでいきます。AI技術のほかにロボット技術も発展を遂げており、接客サービスを行うアンドロイドが登場したり、荷物を配送するドローンが街を飛び交っていたりしています。また、イヤホン型AIデバイスによってあらゆる判断をAIが任せられるようになってしまうなど、過剰に発展した世の中において、人間の役割とは何かを考えられる作品となっています。健司の上司がドローン型AIになってしまったり、反抗期によって娘との関係が悪化したりしていく中、人間に危害を加えてはならない、人間の命令に従わなければならない、上記2つに抵触しない範囲で自分を守らなければならない。といった「アシモフのロボット三原則」を破る事件が起きてしまい、健司たちの身にも困難が降りかかる。そんな困難をどう乗り越えていくのかが見ものです。また、物語を通した家族の心境の変化にも注目していただきたいです。AI技術が発展し、あらゆる分野において人工知能が活用され、AIによって人間の役割が奪われていくといわれるこの時代にこそ、読んでいただきたい作品です。また、人工知能が自己学習をくりかえすことで、「人」としての心を持つことができるのかどうかを問いかけてくる作品にもなっているので、技術者としての将来を描いている方に読んでいただきたいです。

日経文庫
NIKKEI BUNKO

Assertive Communication

アサーティブ・コミュニケーション

戸田久実

互いに尊重し、
認め合い、
主張する

アンガーマネジメントの手法も使って解説

日本経済新聞出版

『アサーティブ・コミュニケーション』

戸田久実 著



7E
下田 匠海

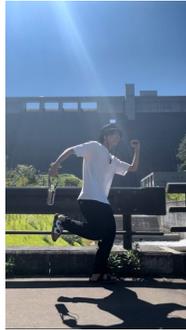
「アサーティブ・コミュニケーション」という言葉を知っていますか。アサーティブ・コミュニケーションとは、お互いの主張や立場を大切にしたい自己表現で、自分が感じたこと、思っていることを、率直に、正直に、相手や自分を責めることなく伝える表現です。近年コロナ禍でのコミュニケーション力の低下やリモートワークの増加によって、コミュニケーションの方法として会社の研修などにも用いられています。

この本では、自己表現は、「アサーティブな自己表現」「攻撃的な自己表現」「非主張的な自己表現」の3つに分類できるそうです。この中でも特に非主張的な自己表現をしてしまう人にこの本を読んでもらいたいです。かくいう私もそうなのですが、こんなことを言ったらどう思われるかが気になる、嫌われてしまわないかと思いつみから、言いたいことを率直に言えないような人です。言いたいこと・不満をため込みすぎると自分の中で爆発してしまい感情的になってしまったり、相手を嫌いになってしまうことがあるかもしれません。そんな人に、誰にでも自己表現をする権利はある、相手を思いやるのと同時に自分も思いやってもいいのだということを教えてください。

この本はアサーティブになるためにどうすべきなのかという説明のほかに、様々な場面でのアサーティブな表現方法や、攻撃的な相手に対するアサーティブな返しの仕方も紹介されています。自分の表現がアサーティブでなかったのだな、とハッとさせられると思います。特にもう少しで新年度が始まるタイミングな今、コミュニケーションで失敗して公開することがないように、ぜひ読んでみてください。



『地図と拳』
小川 哲 著



7A
田原 慎太郎



『ライオンのおやつ』
小川 糸 著



7I
待鳥 維吹

私が、本科生におすすめしたい一冊は小川哲さんの『地図と拳』です。本作品は、日露戦争前夜から第二次世界大戦までの半世紀を、満州の架空の都市である李家鎮（リージャジェン）を舞台に「建築」と「戦争」をキーワードとして描いた長編小説です。私がこの本をすすめたと思ったのは、「物語の側面」と「建築の側面」の二つの面で素晴らしいと感じたからです。

まず、物語の側面についてですが、私はこの本を読んで作者の筆力と取材力に引き込まれました。日露戦争や満州建国などの歴史とフィクションが交差するような物語構成ではあるのですが、私は読んでいの中で、史実にはないけどこの本の中で新たに歴史が造られている、というようなリアルさを感じました。ちなみに巻末には参考文献が8ページにわたって載せられており、作者のこの本にける熱意が感じられます。

そしてもう一つの建築の側面ですが、私はこの本を特に、建築コース/建築コース志望の学生に読んでもらいたいと思っています。なぜなら、この本を読むことで、移りゆく時代の流れの中での「建築」の重要度というものを少し理解することができると思うからです。作中では都市の発展に伴い、建築物の形状や機能が変化していく描写が印象的です。この物語の全体を通して、建築が都市の変遷の歴史を映し出す鏡であり、人間の過去を担保する時間である、ということが伝わってきます。

皆さんが設計の授業で考える建築物も未来まで残ると仮定して、時間の流れを意識して考えてみてはいかがでしょうか。設計に詰まったら是非『地図と拳』を読んで息抜きしてみてください。もしかすると、読んでいの中でアイデアのヒントをくれるかもしれません。

私がお勧めする本は小川糸さんの『ライオンのおやつ』です。この物語は33歳で末期の癌と診断され、余命宣告を受けた主人公の海野雫が、瀬戸内にあるホスピス「ライオンの家」で過ごす物語です。

ライオンの家では毎週日曜日の午後3時からおやつの時間が開かれています。おやつの時間では入居者（ゲスト）が最期にもう一度食べたい思い出のおやつがふるまわれます。しかし、そこで雫はなかなかおやつのリクエストを出すことができません。ここからも分かるように、物語の中盤では彼女が自分の死に本心では納得できておらず、モヤモヤしている様子を読み取ることが出来ます。しかし、最後には身近な人の死を通して、自分の死やこれまでの生き方、行動について考え直していくところに、彼女の心の強さが表現されていると思いました。

また、時間が経つにつれて、元気だったゲストが寝たきりになったり、先週のおやつの時間にいたゲストが次の週にはいなくなっていきます。初めは好きなことを楽しんでいた雫も徐々に容体が悪化し、最終的には鎮痛剤の影響で夢か現実か分からなくなっていきます。この曖昧な場面の描写がリアルで一番印象に残っています。

自分自身は今まで自分の死について考えたことがありませんでしたが、この本を読んで、当たり前前のことが当たり前前にできていることの大切さを改めて感じました。また、自分の死に向き合う難しさや葛藤が表現されており、読み進めるごとに心を動かされました。

悲しく寂しい話の中にも、前向きに生きる人の強さや温かさを感じることが出来る一冊です。ぜひ、一度手に取って読んでみてください。





『汝、星のごとく』
風良 ゆう 著



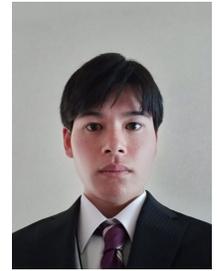
7C
平川 琉偉

男に依存し、我が子にも依存している母性のない母親を持つ、高校生の男女が主人公の物語。似た境遇を持つ2人の高校生が引かれ合う、愛の物語がベースに在りつつも、ヤングケアラー、LGBTQ、SNSでの誹謗中傷、労働環境の不平等など現代風刺の要素も多くはらんでいる作品で多くを考えさせられる。ストーリーは高校生の2人が32歳になるまでの人生模様を2人それぞれの視点から描いているため、その都度生じる心情のすれ違いが読者視点で解決したり、段々と溝が深くなっていったり、ストーリーの展開が素早いながらも、場面ごとに満足感があり直ぐに読了できる作品。また、ほぼ同一の文章であるのに物語を読む前と後で印象が大きく異なる、プロローグ、エピローグにも注目して欲しい。

私はこの作品を通して、自分の人生を生きることの大切さを学んだ。この作品では、夫を奪われ精神病となる母親、既婚者を奪う女性が登場する。不倫はもちろん世間一般的には良くないこと、過ちであるがこの作品ではそうではないという。この作品では不倫のような一般的な間違いをも肯定し、自分の願う人生は自分の手で手繰り寄せるものであり、誰の人生であっても「それは自分のためのもの」だと示してくれる。これは、毒親の依存のせいで自分の人生を邪魔されてしまう2人の主人公にも言える。自分の夢や人生を優先したいのならば、肉親だろうと切るときは切る。それほどの決断をする勇氣が必要なんだ、と不倫や毒親という強烈な要素を例として用いて描く事で、読者に自分の生きたいように人生を生きることの大切さを伝えてくれているように感じた。始めはよくある恋愛小説だという印象であったが、舞台となる田舎独特の世界観、主人公2人視点の語りも相まり、人情味に溢れ、ストーリーだけをとってもかなり読み応えのある物語。その上、人生観についても多くを考えさせてくれる作品で、読む度に生きるエネルギーを貰えるような一冊です。



『お探し物は図書室まで』
青山 美智子 著



6M
松井 優樹

『お探し物は図書室まで』は、五感で感じる心温まる物語です。青山美智子が描く小さな図書室で繰り広げられる、人生の岐路で立ち止まった5人の探求と成長の物語です。

舞台は小さな町の図書室。迷いや悩みを抱えた5人が、自分を探しにやってくることから物語は始まります。図書室の中で待つのは、不愛想ながらも心を聴く司書さん。その特異な存在感に引き込まれつつ、5人はそれぞれの課題に向き合います。

司書さんは図書室の中で毛糸に針を刺し、相談者の心の奥底に迫る質問を投げかけます。彼女の聞き上手さに、相談者たちは思わず心を開いてしまいます。そんな中、司書さんが選んだ本は予測不可能で斬新なものでした。図書室に足を運んだ者たちは、思いもよらない発見と出会いに心躍らされることとなります。

物語の軸となるのは、選書の一部に添えられた「本の付録」。その小さな毛糸玉が、5人の心を優しく包み込むような存在となります。羊毛フェルトを手取る瞬間、相談者たちは自分が本当に求めていたものに気づきます。選ばれた本と付録が、新たな一步を踏み出す力を与えてくれるのです。

『お探し物は図書室まで』は、深い感受性と独自の筆致で知られる青山美智子さんの作品。物語は、相談者が自分の本当に求めていたものに気づき、明日への活力が満ちていく過程を描いています。ユニークで優しい司書さんの存在や、本との触れ合いが、読者にハートウォーミングな感動を届けます。

読者は、5人の人生での経験を通して、自らの迷いや悩みに向き合い、成長していく姿に共感することでしょう。この心温まる小説は、再び自分を見つめ直し、未知の可能性に向けて進むきっかけを求めるすべての人に贈る、感動と癒しの一冊です。新たな一步を踏み出すきっかけを与えてくれる心温まる小説です。



『変な家』
雨穴 著



71
小原 悠聖

今回、私が読んだ本は、ホラー作家の雨穴（うけつ）さんの『変な家』です。この本のあらすじを簡単に説明します。

ある日、主人公の知人が都内の中古一軒家の購入を検討していた。開放的で明るい内装の、ごくありふれた物件に思えたが、間取り図に「謎の空間」が存在していた。知り合いの建築士にその間取り図を見せると、この家は、そこかしこに「奇妙な違和感」が存在すると言う。窓のない子供部屋や子供しか入れない謎の空間がある不思議な間取りとなっています。この間取りの謎を、解き明かしていく物語です。間取りの他にも、以前中古一軒家に住んでいた住人に謎が隠されています。お隣さんの証言で、「以前の住人は、父、母、赤ちゃんが住んでいた。しかし、その物件を外から見ると、たまに5歳くらいの子供が窓から見えることがあった。」というものがありません。一体この物件の間取り設計の裏には何が隠されているのか？窓から見たあの子供は何だったのか？読み進めると、本の世界観にどんどん吸い込まれていく内容です。

実際に読んだ感想は、変わった間取りの謎の推理をしていくミステリーなのは知っていましたが、読み進めていくと気味が悪いですが、続きが気になっていってしまうものでした。文章の構成が会話形式なので、ほとんど対話文で続くのでより読みやすくなっているため、小説が苦手な人でも読みやすい作品だと思います。表紙や本の中に間取りの図があります。その図から自分なりに、違和感がある箇所を想像してみるのも、楽しいと思います。また、雨穴さんの作品で、「変な絵」という本も有明高専の図書館に置いてあります。ホラー小説が好きな方、興味を持ってくれた方は、ぜひ一度手に取って読んでみてください。



『アリアドネの声』
井上 真偽 著



6M
椎葉 龍希

『アリアドネの声』は、巨大地震によって引き起こされた極限状態での生存闘争と、主人公たちの成長を描いた感動的な小説です。主人公であるハルオは、過去の事故で兄を失い、その贖罪の気持ちから救助ドローンを製作するベンチャー企業に就職します。物語は、彼が訪れた障害者支援都市「WANOKUNI」での出来事から始まります。

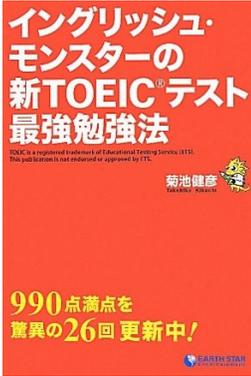
巨大地震に見舞われた都市で、避難する中、目も耳も利かない中川博美が地下に取り残されてしまいます。崩落と浸水で救助隊の侵入が不可能となり、わずか6時間後には安全地帯への経路も断たれてしまいます。中川は三重の障害を抱えつつも、街のアイドルとして活動する強い意志を持っています。

ハルオは、自身が製作した救助ドローンを駆使して、目も耳も利かない中川を安全なシェルターへ誘導するという前代未聞のミッションに挑みます。この非常に難しい課題に取り組みながら、二人の絆や成長が描かれ、物語は読者を感動と緊張の世界へ誘います。

『アリアドネの声』の特徴は、異例な状況下での人間の思想やサスペンスとの融合です。読者は、主人公たちが直面する絶望的な状況や、それを乗り越える力強い意志に引き込まれる作品です。サスペンスと感動が交錯するこの物語は、極限状態での生存と成長に興味を持つ読者にとって、心に響く一冊となることでしょう。

『アリアドネの声』は、現代社会が抱える災害や困難に直面する人々や、その厳しい状況に対処するために力強いメッセージを求める読者に向けられていますので是非読んでみてください。





『イングリッシュ・モンスターの新TOEICテスト最強勉強法』
菊池 健彦 著



6M
徳永 凌麻

『イングリッシュ・モンスターの新TOEICテスト最強勉強法』という本を紹介します。この本は、TOEICで高得点を取りたい人に向けて書かれ、題名の通り最強の勉強法が書かれた本です。

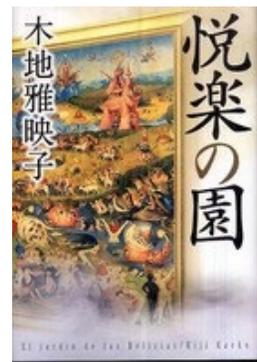
この本の著者は990点満点を26回更新中という実績を持っています。「満点を26回も取れるということは記憶力が良い人なのだろう。」そう思っている人がいると思います。しかし、著者は昔から物忘れがひどく、電子辞書に紛失防止のヒモをつけているような人なんだそうです。そう聞くと「TOEICって思ったより怖くないのかな」と思ってきませんか？そんな著者が提案する勉強法を1つ紹介します。

「三日坊主を繰り返そう」

勉強を始めても飽きて2~3日で飽きてしまう経験はありませんか？そうすると続けられなかった自分を責めてしまう人もいます。著者は三日坊主に大賛成で、三日坊主をもう一度繰り返せばいいと言っています。語学は一度勉強すると記憶の底に残り、次にその単語に出会ったときに思い出しやすくなります。三日坊主も100回繰り返せば300日勉強したことになります。このようにTOEICの勉強は「継続は力なり」よりも「三日坊主反復主義」のほうが有効となっています。

このようにこれまでの固定観念を覆すような勉強法が多数紹介されています。また、TOEICの勉強に限らず、自分の専門の勉強にも応用できると思います。

さて、高専生の皆さんはTOEICについてどのように考えているのでしょうか？進学、就職のために高得点を目指している人や自分には関係ないと何もしていない人などそれぞれ思いがあるでしょう。英語は世界の共通語とされており、TOEICは就職の採用の基準となっています。自分をアピールする大きな武器となるのでぜひ、この本を手にとってハイスコアを目指してみてください。



『悦楽の園』
木地 雅映子 著



6A
泉 裕介

みなさんは「発達障害」というものをご存じでしょうか？近年よく聞くようになった言葉ですね。テレビで紹介されているのを見たことがある方もいるかもしれません。ここでは、そんな発達障害の子どもを取り巻く環境を描いた一冊をご紹介します。

物語の舞台は中学校。主人公の相原は大人びた考えを持ち合わせた少女で、同年代の子どもたちを俯瞰的に、どこか冷めた目で見ながら学校生活を送っています。そんな彼女のクラスメイト南は、いつも一人ぼっちで、誰にも理解できない化け物の絵ばかり描いています。彼は明らかに「普通」ではない存在だったのです。ある日、南の絵を見た相原は彼に関心を持ち、二人は徐々に仲を深めていきます。不良少年の染谷は、南のことを初めはバカにしていたのですが、相原に出会ったことで徐々に友好的になっていき、いつしか3人で共に過ごす時間が長くなっていました。

そんなある日、南は学校に行くことができなくなってしまう。学校に居場所の無くなった南をもう一度連れ戻すため、相原は学校にみついている「普通」を壊すことを決心するのです。相原によって、生徒たちは恐れずに自らの個性をさらけ出すようになっていきます。自らのアイデンティティを誇りに思い、それを発揮できる環境は、私の目にはとても魅力的に映りました。大きく変化していく中学校はどこへ行きつくのでしょうか...

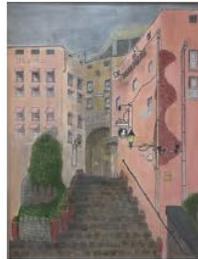
我々が普段から当たり前のように知っている「普通」とは何なのか、それを押し付けられる現代社会において「普通」ではない人々はどう生きていけばよいのか。「普通」に抗う子どもたちの戦いが描かれた本です。ぜひ一度手に取って読んでみてください。

2024年有明高専美術ギャラリー作品介绍

絵画



『波動』
奥苑 和司



『街角』
藤吉 美保子



『機関庫』
小柳 規久絵



『麗日』
上村 恵子



『暁天』
木戸 直道



『笑懐橋』
塚本 和美



『時のながれ』
横山 多佳枝



『佇む女』
永井 正文



『バラ』
牟田 英昭



『静物』
牟田 志津子



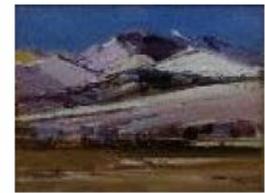
『少女燈籠踊り』
石井 保



『おかまど山遠望』
堤 和則



『グロリオサ』
田中 栄



『朝陽阿蘇』
加治屋 陸



『白い花』
木村 和子



『6月の花』
河島 房子



『風にのって』
岩本 久子



『春のバラ』
松尾 忠之



『椿の里』
黒田 満里子



『ドナウベントの午後』
松尾 忠之



『優しい時間』
清水 正敬



『海の幸山の幸』
河野 康子



『消えゆく立抗』
寺田 晃洋



『曼陀羅II』
皆島 万作

写真



『タカラモノ』
田中 浩久



『オキナ-草』
浦田 碩也



『放水合戦』
鈴木 安德



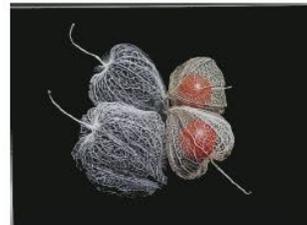
『石アート』
高口 博文



『行進』
今村 誠二

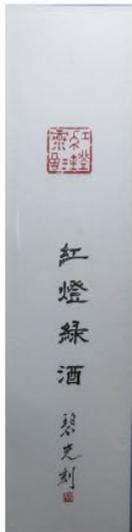


『生きる』
渡邊 精之



『遠き日の思い出』
ふるいけ博文

書



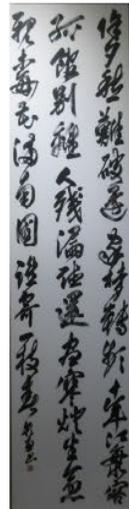
『红灯緑酒』
田中 碧光



『星河不動』
虎本 溪風



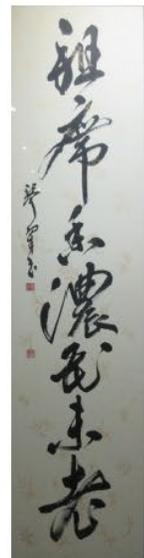
『筆のあと』
小柳 少鼎



『除夕』
本村 彩恵



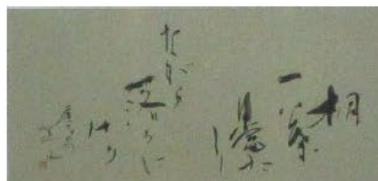
『問梅閣』
中本 管城



『魏野詩』
田河 琴翠



『梅一輪・一輪ほどの
あたたかさ』
山口 八石



『桐一葉』
川井 遥水



『雪まの草の春』
小柳 少華

ブックハンティングを開催しました

ブックハンティングとは、図書館に置きたい本を書店に行って直接選んでもらうイベントです。12月26日（火）に丸善博多店で実施し、8名の学生さんに参加してもらいました。



年末の12/26(火)、恒例のブックハンティングがありました。博多駅にある丸善博多店様にお邪魔して、有志の学生さん達と図書館に揃える新たな書籍を見つけて行こうという企画でした。この企画は半年毎に定期実施していて、今回は私が初の引率となりました。

14時に現地集合しました。まずは店員の方に説明を受けました。ハンティングといっても実際にその本を取り集めるのではなくて、渡されたリーダーで好きな本のISBNを読み取って行きました。説明後散開して、学生さん達は各自広い店内をハンティングに出ました。あっという間に見失いました(´Д`≡`Д`)? 元気ですねー。

私もハンターの一員として店内を廻りました。デジタル全盛の現在、本を脚で探すのは無駄な行為とみられるかもしれませんが、今や自宅においてクリック一つで購入できますから。若い頃はそんなシステムがなかったこともあり、頻繁に大型書店を廻っていました。専門書籍の在庫は大型書店に限られました。学生時代は大阪にいましたので、休日に梅田の紀伊國屋書店や旭屋書店(現在は閉店)を廻っていました。

しかしながら、今や業務に追われる歳になってしまい、出歩く回数がめっきり減りました。読書量も減りました。この機会が自らを再度奮い立たせる契機になればとも思いました。

デジタルは便利で洗練されていますが、遊び心がありません。散策している途中にふと目に入ったり、横目に映ったりする書籍が実は最高の一冊かもしれません。コストパフォーマンスやタイムパフォーマンスなど効率を重視する世相ですが、それでは視野を自ら狭めていくだけです。皮肉にも非効率な結果を招き、知恵(フロネシス)への道とはなりません。遊びという余白が、道を切り開くものと思います。いわゆる「大いに遊べ」です。

このハンティングで下記2冊に邂逅しました。

- ・ トーマス ハイガー (渡会圭子 訳)、「大気を変える錬金術」、みすず書房 (2017)。
- ・ 小坂井 敏晶、「矛盾と創造 自らの問いを解くための方法論」、祥伝社 (2023)。

前者は、化学者ならば誰もが知るハーバー・ボッシュ法に関するものです。表の華々しさだけでなく、化学者として少し深く考えてみたいと思い、手に取りました。今はEコース教員として電気の世界にいますが、元々はCコース宜しく化学の出身であり、基本は物質創造を主眼とする化学者でありますので。

後者は、人文コーナーを廻っていてふと目に入りました。ちょっと気になってパラパラと立ち読みしました。当初考えていなかった本でした。めくったその先で、とある言葉に突き刺さりました。しばらく動けませんでした。

それは、「実験は発見を可能にする技術であり、証明するための道具ではない」という一文でした。社会科学の本なので分野は違えども、実験を主とする点は共通ですから、深く刺さりました。広く無数の書籍がある店内で邂逅したことは、神さまから無知と怠惰を叱責されたのかもしれませんが。(図書館運営室・室員 鷹林)



ブックハンティングで選んだ本は図書館の新刊コーナーにあります。POPも作成してもらっているので、ぜひ手に取ってみてください。

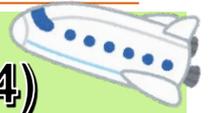
ブックハンティングで購入した本

| 書名 | 著者 | 書名 | 著者 |
|--------------------------------|-----------------|---|-------------------------|
| 大気を変える錬金術～ハーバー、ボッシュと化学の世紀～ | トーマス・ハイガー | 一寸先の闇～澤村伊智怪談掌編集～ | 澤村 伊智 |
| 矛盾と創造～自らの問いを解くための方法論～ | 小坂井敏晶 | 好きです、死んでください | 中村 あき |
| 磁力と重力の発見<1> 古代・中世 | 山本 義隆 | あらゆる薔薇のために | 潮谷 駿 |
| 磁力と重力の発見<2> ルネサンス | 山本 義隆 | あの魔女を殺せ | 市川 哲也 |
| 磁力と重力の発見<3> 近代の始まり | 山本 義隆 | 歌われなかった海賊へ | 逢坂 冬馬 |
| 人類はどれほど奇跡なのか ～現代物理学に基づく創世記～ | 吉田 伸夫 | ひまわりは恋の形 | 宇山 佳佑 |
| 星を編む | 瓜良 ゆう | となりのナースエイド | 知念 実希人 |
| マリスアングル(〔姫川玲子シリーズ〕) | 誉田 哲也 | ぎょらん | 町田 そのこ |
| その鏡は嘘をつく | 薬丸 岳 | エレファントヘッド | 白井 智之 |
| もう、聞こえない | 誉田 哲也 | さやかに星はきらめき | 村山 早紀 |
| プラージュ | 誉田 哲也 | パブリカ | 筒井 康隆 |
| カード師 | 中村文則 | レーエンデ国物語 | 多崎 礼 |
| 罪の境界 | 薬丸 岳 | 奇譚蒐集録 鉄環の娘と来訪神 | 清水 朔 |
| 火車 | 宮部 みゆき | 響け!ユーフォニアム | 武田 綾乃 |
| 梅雨物語 | 真志 祐介 | ～北宇治高校吹奏楽部へようこそ～ | |
| 紅だ! | 桜庭 一樹 | 正しさってなんだろう | 佐藤 優 |
| 時計泥棒と悪人たち | 夕木 春央 | ～14歳からの正義と格差の授業～ | |
| 寄せの基本が身につくはじめての詰める | 甲斐日向 | 適職の地図 | 土谷 愛 |
| ぎんなみ商店街の事件簿<BROTHER編> | 井上 真偽 | ～自分だけの強みが遊ぶように見つかる～ | |
| ぎんなみ商店街の事件簿<SISTER編> | 井上 真偽 | 吸血鬼カーミラ | ジョゼフ・シェリダン・レ・ファニュ/平井 呈一 |
| 黒い絵 | 原田 マハ | | ジェイムズ・P・ホーガン |
| 推し、燃ゆ | 宇佐見 りん | 星を継ぐもの 新版 | 相沢 沙呼 |
| あした死ぬかもよ? | ひすい こたろう | invert～城塚翡翠倒叙集～ | F |
| ～人生最後の日に笑って死ねる27の質問～ | う | 真夜中乙女戦争 | 小栗 虫太郎 |
| 美しいインクルージョンの鉱物図鑑 | atelier Ruchi | 黒死館殺人事件・完全犯罪 | 東野 圭吾 |
| 九州・琉球の戦国史～戦いの国から安全の国へ | 福島 金治 | レイクサイド | 伏瀬/みつば一 |
| 立花宗茂 | 中野 等 | 鏡の国 | 岡崎 琢磨 |
| 対怪異アンドロイド開発研究室 | 饗庭淵 | 光と闇と色のことば辞典 | 山口 諤司 |
| 天使の囁り | 真志 祐介 | 龍の墓 | 貫井徳郎 |
| 戦物語 | 西尾 維新 | 白銀の逃亡者 | 知念実希人 |
| キドナプキディング～青色サヴァンと戯言遣いの娘～ | 西尾 維新/竹 | 美しい鉱物 | |
| 眠れる美女 | 川端 康成 | ～レアメタルから宝石まで鉱物の基本がわかる!～ | |
| クレイジーDの悪霊的失恋 | 上遠野 浩平/ | 薬屋のひとりごと<7～9> | 日向夏 |
| ～ジョジョの奇妙な冒険より～ | 荒木 飛呂彦 | 煌夜祭 | 多崎礼 |
| 変な家 | 雨穴 | 勉強が面白くなる瞬間 | バク・ソンヒョク |
| 夢をかなえるゾウ<1> | 水野敬也 | ～読んだらすぐ勉強したくなる究極の勉強法～ | ク |
| 三体 | 劉 慈欣/大森望/光吉ほか | 嫌われる勇氣 | 岸見 一郎/古賀史健 |
| ハロルドとモード | コリン・ヒギンズ | ～自己啓発の源流「アドラー」の教え～ | |
| そして誰もいなくなった | アガサ・クリスティ/青木 久恵 | 一生頭がよくなり続けるすごい脳の使い方 | |
| 大限界～オタク用語辞典～ | 名古屋短期大学 小出ゼミ | ～え?いつまで学生時代と同じ勉強法やってんの?脳の仕組みが変わったんですけど～ | 加藤 俊徳 |
| 人間標本 | 湊 かなえ | いつも機嫌がいい人の小さな習慣～仕事も人間関係もうまくいく88のヒント～ | 有川真由美 |
| イヌはなぜ愛してくれるのか | クライブ・ウィーン | 頭のいい人が話す前に考えていること | 安達 裕哉 |
| ～「最良の友」の科学～ | | 「具体⇄抽象」トレーニング～思考力が飛躍的にアップする29問～ | 細谷 功 |
| あなたが誰かを殺した(加賀恭一郎シリーズ) | 東野 圭吾 | 最高のコーチは、教えない。 | 吉井 理人 |
| 可燃物 | 米澤 穂信 | 世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか?～経営における「アート」と「サイエンス」～ | 山口 周 |
| Q | 呉 勝浩 | マンガでわかる心理学～座席の端に座りたがるのは?幼いころの記憶がないのは?～ | ポーポー・ポロダクション |
| 東明になれなかった僕たちのために | 佐野 徹夜 | 自分のことだけ考える。～無駄なものにふりまわされないメンタル術～ | 堀江 貴文 |

特設コーナー

2024年図書館の旅 (Library Odyssey 2024)

第四回 源流との邂逅



副館長 柳原 聖

己の理想の図書館を求めて副館長があちこちの図書館を訪問するこの企画ですが、改めて我が校の図書館棟をぶらぶらしていると「なんでこうなってるの？」などと感じることが多々あります。そのような模索する日々の中で、ある研究論文に偶然出会い、我が校図書館の「源流」を見つけることができました。

現在の有明高専図書館ですが、その源流は今をさかのぼること58年前の1966年に発行された本校紀要の第一号の一番最初の論文「高専の図書館はどうあるべきか？」（甲木季資ほか有明高専教職員，有明高専紀要、(1966), No. 1, p. p 2-54.）にあるようです。※紀要というのはその学校の先生方の1年の研究活動などをまとめた論文集です。文末のQRコードからダウンロードできます。

この論文掲載当時の国立大学には附属図書館法や図書館設置基準法があり「理想の図書館像」が明記されていました。ところが高専は各地に新たに誕生したばかりということもあり、その理想像というものがなかったようで、先達の先生方が学生も交えてそれを議論し論文としてまとめたのでした。そこには蔵書したい図書や館のレイアウトだけでなく、美術品の設置等についても当時の高専図書館の最先端が議論されており、現在の姿に通じる青写真が描かれていました。（#余談ですがこの論文は、他大学の図書館情報に関する研究論文等でも引用されていたりします。地方高専の紀要なんて誰も見ていないだろうと半ば自虐的に高を括っていましたが、さにあらず。誰かがどこかで我々の出版物を見てくれているというこの事実には私は驚きと感動をおぼえました。）

さて、今から14年前の2010年に文部科学省ではサイバー時代の大学図書館のあり方について審議がなされました。小中学校、高校、特別支援学校では同じような視点から「学校図書館ガイドライン」が策定されており、学校司書が図書館にいるようにする環境づくりが進められたりしています。しかし、高専図書館はこれらの大学短大や小中学校や高校とも違うためなのか、新しい時代の図書館像が模索された形跡がなく、放ったらかされているような感じがします。

「図書館棟と言うくらいだから建物の3フロアすべて図書館として広々と統合されたものだったらなあ... あるいは生成AIが話題だけれども、こういう新しい技術を駆使してサイバー空間から良質な情報を学生や教職員に提示してくれるCybrarian（サイブラリアン：情報科学+司書）がいてくれたらなあ...」そんなこんなを夢想しつつ、紀要創刊号の先達たちの思いも汲み取りながら今一度皆で理想の図書館の「Big Picture」を模索し描く時期が来ているのかもしれない。4回の連載を通した一区切りとして、そのような気づきを得ました。

まあブルーローズ？



美術ギャラリーで見かけた女性に
愛をこめて花束を。

うん、プレゼント♡
うちの図書館の前にも
彫像があるといいのになあ...
なんて一緒に語り合えない？



編集後記

ブックハンティングの記事にもあるように、本を通して気づかされることや新しい発見がたくさんあります。図書館には色んなジャンルの本が置いてあるので、時間がある時は、図書館に立ち寄ってみてください。新しい出会いがあるかもしれません。そして、ブックハンティングの参加もお待ちしております！[図書係 松本]